2018年度「教学と現代」報告

金子　昭

２月26日、天理大学研究棟第１会議室において「天理教のすべてが分かる事典を目指して―『天理教事典　第三版』刊行によせて―」というテーマの下、2018年度の特別講座「教学と現代」が開催された。教会本部月次祭終了後の時間帯とあって、多くの教友が参加した。

基調講演１として、佐藤浩司・天理大学名誉教授が「事典編集に40年間携わってきて」と題して発題。佐藤名誉教授は1977年に初版が刊行された時期から『天理教事典』の編集に携わり、この度の第三版にあたっては編集責任者を務めた。

佐藤名誉教授は、20年おきに事典を刊行してきた経過について、その苦労話やエピソードも含めて編集の変遷について語った。初版の『天理教事典』について言えば、その構想は、おやさと研究所が再編された1972年（昭和47年）の時、公共の図書館に置いてもらえる教内書籍を出版することを目指して出てきたという。会合を重ねる中で編集委員の陣容も決まり、事典編集は研究所の事業として進められた。当初約4,000項目の案が出されたが、毎週夜遅くまで会議を重ね、最終的には大中小の各項目をあわせて約1,200項目へと厳選され、執筆者も336名を超えた。

ただ、依頼はしてみたものの、なかなか原稿が出て来なかったり、また原稿が揃ってようやく組版を作っても、当時は写真植字による製版の時代であり、何度も繰り返される校正作業はとても骨の折れる作業となった。天理駅前のビル６階に一室を借りて、佐藤名誉教授は３か月缶詰状態になりながら作業を進めたという。1977年（昭和52年）の刊行は、天理大学創設者である中山正善２代真柱の十年祭にあわせてのものである。

1981年(昭和56年)より、編集中に問題になった事柄を考究し、改訂に備えるために、天理教学懇談会がもたれたが、これがやがて次なる編集会議につながっていくことになる。1989年（平成元年)、初版の中の直属教会、教区、海外伝道庁の各歴史の部分が、『改訂天理教事典　教会史篇』として独立して出版されるにいたった。そして大幅に新規項目を増やし、また教語の説明も充実させて、『改訂　天理教事典』を1997年（平成９年）に刊行し、この『改訂版』に基づいていっそう完璧を期して、2018年（平成30年)、『天理教事典　第三版』を刊行したのである。

基調講演２は、澤井治郎・おやさと研究所研究員による「３冊の『天理教事典』の内容の変遷」。これら３冊の事典の内容が、具体的にどのように移り変わってきたかについて、実際の事典項目に即して詳しく解説した。「初版」1,262の項目中243項目を占める直属教会名は、項目数としては約２割だが、比較的長文の項目が多く、分量としては半分を占めている。その一方で、原典の用語や教会本部の組織については、比較的簡潔な形で解説されていた。そのため、『教会史篇』を独立させた後の『改訂版』では、用語に関する項目が細分化されると同時に大幅に増補され、2,816項目が収録されることになった。特筆すべきは、全頁数の約６割が新たに執筆されており、さらに従来の項目もかなり書き直されたことである。組織的な活動についての増補とともに、三原典や教典、また稿本教祖伝及び逸話篇を読むために便利な言葉・事項が重点的に増補されている。そのため、『改訂版』は内容的には「新版」と称してもいいくらいの事典になった。

『第三版』の基本はこの『改訂版』であった。削られたり縮小されたりした項目や図版もあるが、全体で2,841項目が収録されている。また、全項目にわたって文章や内容の総点検が行われ、大半の項目に大小さまざまな修正が施された。とくに人権的な問題や天理教学の展開など、現代的な観点から従来の説明を修正・加筆したものが多い。そのほか、天理教内のさまざまな動きについても更新された。澤井研究員は、事典編纂・改訂の意義として、誤りなき天理教の理解に資するだけではなく、時代の流れに合わせて天理教全体の見直しにつながるものであることを強調した。

その後、「『天理教事典　第三版』の意義と今後の課題」と題したパネルディスカッションの部に入った。はじめに、堀内みどり主任（用語班代表)、佐藤名誉教授（歴史・人名・地名班代表)、森洋明研究員（組織・文化班代表）がそれぞれ担当した班の編集内容についてコメントした。

堀内主任は、最も時間をかけて検討したのがこの用語に関する部分であることを述べた。その際、新旧項目を選定し、既存の項目でも徹底した検討がなされた。とくに原典引用を増やすと同時に、その徹底的チェックもなされた。また、昨今の人権感覚に配慮して内容の検討が行われ、表記の見直しと統一がはかられた。

佐藤名誉教授は、現真柱についての新しい項目や逸話篇の登場人物の追加を行ったことを述べた。その際、地名を現在の表記とも対照させて確認し、生没年の表記についても統一がはかられた。また、年表についても『改訂版』以後20年間分が追加され、また全体にわたって本文との整合性がチェックされた。

森研究員は、天理教の組織が20年前と変わったことに鑑み、最新版の組織機構を掲載したことを述べた。森研究委員は、教内各部署との連絡調整を行うさいの難しさや、海外伝道における記述の濃淡の問題、また美術やスポーツなど幾つもの部署にまたがる領域への対応など、編集作業において苦労があったことに言及した。

このあとフロアを交えて質疑応答が行われた。天理教独自の言い表し方と世間一般のそれとの齟齬（そご）の問題、取り上げる人物をもっと広げるという可能性、また今後の方向性としてのウェブ版における課題などについて、さまざまな意見交換がなされた。

最後に「総括と展望」として、高見宇造所長が、このたびの『天理教事典　第三版』の意義について語った。事典の編纂は、おやさと研究所だからこそできたことである。このたび研究所の総力を挙げて編集・刊行したこの事典を、今後いっそう教内外の方々に読んでいただきたいと、高見所長は話を締めくくった。